

食で結ぶ地域コミュニティ 久米「ふれあい食堂」

特集 ②



(松山市)
久米ふれあいタウン
づくり協議会
事務局長
仙波 英徳



久米ふれあいタウンづくり協議会とは

松山市久米地区は、松山市中心部から南東に位置し、病院などの生活環境や公共交通機関も整備され、人口は3万人を超える。市内41地区でも3番目に人口が多い地域である。近年、高齢化率が22・1%と地域課題の一つになっている。

「久米ふれあいタウンづくり協議会」は、

平成26年に結成され、構成団体である町内会を含む公民館、社会福祉協議会、防犯・交通安全協会、自主防災会、4小学校・1中学校PTAなどの地域の各種団体が連携し、地域が抱える課題や問題をオール久米で取り組むまちづくりの協働ネットワーク組織である。

「通学合宿」で気づいたこと

久米地区では平成21年から高校生提案による「通学合宿」を始めた。「通学合宿」とは子供たちが、夜は公民館に宿泊まりし、昼間は学校に通う6泊7日の集団宿泊体験事業である。目的は、集団での生活体験から①自他の違いの気づき②他人の発見③自分の発見である。これらの気づきを通し子供たちが社会的な存在としての自分を自覚し、やがて他者や地域社会の支えの中に生きている自分に気付いて欲しいとの願いから続けている。初対面の子もいる4校からの小学校4・5年生28名が互いに心を開くのは、皆で作った食事を一緒に食べる時である。やはり、関わりあう力には、同じ釜の飯をとるのが有効のようである。ところが、子供たちの食事を眺めていると、3つの点年々ひどくなっている。1つは、「時間がかかる。周りとスピードが合せられない。」2つは、「好き嫌が多い。好きな物しか食べない。」3つは、「食の細い子が徐々に増えている。栄養バランスを

崩している子供が増えているようである。」だ。このままでは子供たちの「食」が危ないとの思いが徐々に強くなった。

「ふれあい食堂」の開店

栄養バランスのとれた食事や、皆で食事を取る事の大切さを地域課題にし、公民館のコアメンバーで話した。

よく「孤食」と言われるが「こしよく」には6つある。孤食(一人で食べる)・個食(一人一人が食べる)・固食(好きな物しか食べない、食の固定化)・小食(少量しか食べない)・粉食(小麦等が多い)・濃食(味付けが濃いものを好む)。

さらに、この6つの課題は子供だけでなく高齢者、特に独居老人にも共通する課題との指摘もあった。そこで、通学合宿の新バージョンとして、孤食傾向のある子供と高齢者を対象に

皆で一緒に食事をする「場」を提供する事になった。

地域に調理スタッフ・食材提供・学習支援・寄付金等のボランティア



調理風景

アを呼びかけると、想定以上の応募があった。さらに、学校給食の企業から事業への協賛とスタッフ・レシビ・衛生管理の指導をしても良いとの申し出もあった。持続継続事業としての可能性が見えたので、平成28年7月14日から毎週1回「ふれあい食堂」を開店する運びとなった。

試行錯誤

初期3ヶ月はスタッフ研修期間と考え、参加呼びかけを久米児童クラブと高齢者クラブに限定して開催したが、大人100円・子供無料の設定が良かったのか、高齢者と子供が会話しながら食事をするのが楽しかったのか、リピーターが多い。現在は毎回40食程度を提供している。



中学生ボランティア

実施していると、子供と大人の食の量が違う事に気づく。そこで子供と高齢者の交流促進の工夫も兼ねて子供席と大人席を向かい合わせに設定し、配膳の時に食事を調整して並べる事にする。

「ふれあい食堂」が生み出しているもの
「この指とまれ」と「持ち寄り」方式ではじめてこの事業は、地域に新しいボランティアネットワークと食を通じた異年齢のコミュニティを生み出した。具体的には、事業に賛同した大学からの定期的な大学生の参加や、地元の料理店から具材提供。調理する人も大学生・主婦・企業人などと異年齢。食材提供も地元農家・家庭菜園からと多岐に渡りボランティアの輪が広がっている。さらに食事をする人も小学生から高齢者まで幅広い年齢層で、会話をしながら食事をするという。食事後は各自が調理場まで食器を運び洗い片付けている。食を通じた新しいネットワークというより親密度が高い、粘りつきのある「納豆ワーク」が

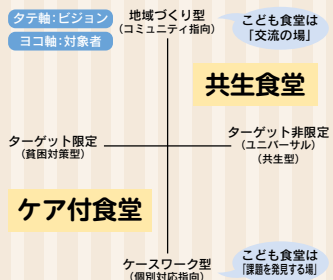


図2 「共生食堂」と「ケア付食堂」

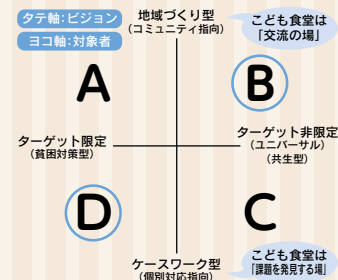


図1 子ども食堂の類型(理念型)

出現してきている。法政大学の湯浅誠教授は「子ども食堂」を図1・図2・表1のように表1のようににビジョンと参加者を軸により分類されている。久米の事例は「共生食堂」の方向性で進んでいる。

今後の課題と展望

スタッフ研修も終わったので、4ヶ月目からは中学生も巻き込んだ活動に広げようと、配膳係として中学生を呼びこんだ。また、需要層としては週1回では少ない。公民館の2階まで歩いて上がるのが無理な高齢者もいた。確かにこうした「場」は出来るだけ身近に多くあった方がいい。幸い久米には11町があり、それぞれの集会所に調理場と広間は備えられている。少額の予算で新たなハード設置は出来ないこのソフト事業を、今後は各町内会でも開催できるような検討を始めたい。



食事風景

	共生食堂	ケア付食堂
対象(ヨコ軸)	誰でも	貧困家庭の子
ビジョン(タテ軸)	交流促進	課題対応
他にも以下のような違いが...		
大人の参加	大歓迎	限定的
運営形態	オープン	クローズ
その場に来る人は...	「参加者」	「利用者」
スタッフ・ボランティア	大人も子どもも、プロも素人も	基本は専門家(プロ)
運営上記を付けること	参加者同士がタテ、ヨコ、ナメに縦横無尽につながっているか	スタッフが子どものさまざまなサインに気づけているか

表1 対照表